

『宇治拾遺物語』の「涙」の背景

佐藤茂樹

「笑い」に比較的着目されることの多い『宇治拾遺物語』の「泣く」「涙」に最初に着目されたのは、田村憲治氏であった。『宇治拾遺物語』巻第二話「静観僧正雨を祈る法験の事」では「涙をながし」と表現されているのに対し、同話の『打聞集』第四話には、この表現が見えないこと、その他『今昔物語集』の例なども比較され、「即座に宇治拾遺編者の説話理解の方法を論じることには問題がある」とされながらも、「宇治拾遺物語においては涙が各々の場面、また各々の話と深く関わる形で表現されていることがわかる。宇治拾遺編者は、涙を決していいかげんに扱ってはいないように思えるのである」と考察されたのであった。

『宇治拾遺物語』には、「涙」は一九例、「血の涙」は二例、「泣く」は八一例、「なきかなしむ」七例などその他の複合動詞の例二二例ある。⁽²⁾「涙」二二例に対して「泣く」は一〇九例である。『今昔物語集』の「涙」二二七例に対して、「泣

く」は四八七例である。感極まった時に泣き、そして涙を流す。泣くと言い、涙を流すという、「涙」の方に幾分印象の鮮明さがあるように思われるが、両者には意味的用法的な違いがあるとは思えない。しかし、用例数の差を見る時、そこには偶然に依るのではない、意識的な「涙」の表現の存在が予想される。『今昔物語集』との差を見る時、その感は一層強くなる。『宇治拾遺物語』研究においては、同話との比較研究によりそれぞれの作品の表現方法・編纂目的の違いなどが論じられるが、本稿は『宇治拾遺物語』の「涙」の用例を考察することにより、『宇治拾遺物語』の「涙」の表現的特徴を考えようとするものである。

一

「三川入道、遁世之間事」(五九 卷四ノ七)では、三川入道、大江定基は「道心のおこりければ、よく心をかため

んとて」雉を生きたまま料理し、食することを提案する。その場面で、大江定基は「涙」を流している。

かくて前にて、生けながら毛をむしらせければ(中略)「これがかく鳴こと」と興じわらひて、いとゞ情なげにむしるものもあり。(中略)「ことの外に待けり。死たるをろして、いりやきしたるには、これにまさりたり」などいひけるを、つくく〜と見聞きて、涙をながして声をたてて、おめきけるに

この三川の守の「涙」は、残酷な場面を見ても、三川の守に氣に入られようと追従している家来の姿をみて、あまりの浅ましさと情けなさに涙したのである。又、自らの發心を堅固なものにするためとはいえ、自らが提案して雉にいわれなき苦痛と死を与えたことに対して、深い罪の意識と雉への謝罪の思いからくる涙であつたと考えられる。但し、同話とされる『今昔物語集』巻第一九第二「参河守大江定基出家語」においても、「守ツクく〜ト見聞居テ、目ヨリ大ナル涙ヲ落シテ、声ヲ放テ泣ケル」と同様な表現がなされており、「宇治拾遺物語」の独自の「涙」の表現と解することは出来ない。

「越前敦賀女観音助給事」(一〇八 卷九ノ三) においては、「泣く」と表現される場面が一〇箇所に対して、「涙」

は一箇所である。主人公の女が父に続いて母を亡くした時、「泣きかなしめども、いふかひもなし」と描かれている。

真実悲しくて涙を流しているのである。又、観音に祈る場面での「我親の思しかひありて、助け給へ」と、観音に向奉て泣く〜申」には「途な思ひからの涙、「此仏の助給べきなめり」と思ひて、水うち浴みて参て、泣く〜申」には感激の涙であると思われる。更に、旅人を饗応するための食べ物、酒などを用意してくれたことに対し、主人公の女の「悦泣きければ」には、感動のあまりの感激の涙であり、準備した「女もうち泣きて」には、役だったことへの喜びの涙だと考えられる。まさにこれらは、真実の思いを根底においた分かりやすい涙だと言える。

一方、「涙」と表現されている場面は、旅立ちの前に一度、観音を拜む所である。

観音の御肩に、赤き物か、りたり。あやしと思て見れば、この女に取らせし袴也けり。「こはいかに、この女と思つるは、さは、この観音のせさせ給なりけり」と思ふに、泪の雨しづく〜と降りて

この涙は長い間、観音を信じてきた甲斐があつたことに對する溢れる思いからのものであり、何よりも観音に對する深い感謝の念からのものと考えられる。「御厨子所に使ひ

ける女の、むすめ」が何くれと世話してくれるのは、「たゞ観音の導かせ給なめり」と思つてはいたものの、ここで初めてこの女は観音の化身であることに気付いたのであった。まさにクライマックスの場の涙なのである。又、女が観音の化身であると分かつた時には、この女に対してもつとお札を、もつと感謝の気持ちを表すべきであつたと強い後悔の念に襲われたことと思われる。この痛切な悔恨の心もこの涙の中には込められているのである。更に、これまでの辛く苦しかったことを思い出しての涙でもあつたとも思われる。

この場面に引き続いて、

しのおとすれど、ふしまろび泣くけしきを、男聞き付て、あやしと思ひて走来て、「何事ぞ」と問ふに、泣くさまおほるけならず。(中略)「それを取らずと思つる袴の、この観音の御肩にかゝりたるぞ」といひもやらず、声を立てて泣けば、男も空寝して聞きしに、女に取らせつる袴にこそあんなれと思ふがかなしくて、おなじやうに泣く。郎等共も、物の心知りたるは、手をすり、泣きけり。

と泣く様子が連続して描かれている。ここでの主人公の女の「ふしまろび泣く」「声を立てて泣けば」は、先程見た

「涙」と二連の場面であるだけに同じ意味でのものと考えられる。それだけに、最も重要な所だけに「涙」が用いられていると考えられるのである。そして、男、郎等たちの涙は「観音の靈験への感動」⁽³⁾と考えられる。「泣く」「涙」との間には、分かりやすい、単純な涙とクライマックスでの二つ以上の理由をもつ複雑な涙との違いがあると思われる。但し、同話とされる『今昔物語集』巻第一六第七「越前国敦賀女、蒙観音利益語」においても同じく「涙ヲ流シテ臥シ丸ビ泣ク」の描写がなされており、『宇治拾遺物語』の独自性と考えることはこの例では断定出来ない。

「持経者叡実効験事」(一四一 卷二ノ五)では、閑院大臣、藤原冬嗣のわらわ病みを治すため、叡実が寿量品を讀み上げる時

目より大なる泪をはらくと落して、泣事限なしと描かれている。病を治そうとして一途に真剣に読経することからくる涙であろう。叡実は悠々としていて、拘りなく物事をおおらかに捉える、度量の広さを持った持経者として描かれている。しかし、「蒜を食侍り」として、最初は読経を断ろうとしている。ところが、冬嗣が荒見川のあたりで発病したため「只今まかり帰事、かなひ侍らじ」という事情を知つて、法華経を読経することになつたのであ

る。その際も

風重く侍に、医師の申にしたがひて、蒜を食て候也。

それにかやうに御坐候へば、いかでかはとて参て候也。

法花経は浄不浄をさらはぬ経にてましませば、読奉ら
ん、何条事か候はん。

と、「蒜」を食していたことを弁明し、不浄説法の問題ないことを断っている。使命感からの行為ではあるが、その心の底には不浄説法をするという強い後悔と慚愧の念があったのではないだろうか。それが「蒜」を食していたことの弁明となり、「法花経は浄不浄をさらはぬ経にてましませば」の言葉となつて表れたと思われる。『宇治拾遺物語』冒頭の第一話、第二話にはそれぞれ「されば、はかなく、さい読みたてまつるとも、清く読みたてまつるべき事なり。

『念仏、読経、四威儀式をやぶる事なかれ』と恵心の御房もいましめ給にこそ」、「不浄説法する法師、平茸に生まる」と記されているのである。それだけに「法花経は浄不浄をさらはぬ経」とは自らを慰め、納得させる言葉でもあったのだらう。

ここでの「涙」には一心に祈ることからと、人のためとはいいながら不浄説法していることからの嘆きの涙であつたと考えられる。但し、この例も同話とされる『今昔物語

集』巻第一二第三五「神名睿実持経者語」においても「目

ヨリ涙ヲ落シテ、泣ク誦スルニ、其ノ涙、病者ノ温タル胸ニ氷ヤカニテ懸ルガ、其レヨリ氷エ弘ギリテ」と描かれて
いる。熱い体を冷やす機能として涙が捉えられているのである。違いはあるが、「涙」が描かれている点、この説話から『宇治拾遺物語』の「涙」の独自性を言うことは出来ない。

「空也上人臂、観音院僧正祈直事」(一四二 卷一二ノ六)では、空也上人は折れて曲がつた肘を余慶僧正の祈りによつて治してもらつた時に

曲れる臂、はたとなりて延びぬ。則、右の臂のごとく

に延たり。上人、泪を落して、三度礼拝す。見人、み

なの、めき感じ、或は泣けり

と描かれている。この「涙」は第一義には、折れた肘を治してもらつたことの感謝の涙、そして、治つたことへの喜びの涙として考えられる。空也上人の折れた肘は「我母、物妬して、幼少の時、片手を取て、投侍し程に、折て侍るとぞ聞侍し。幼稚の時の事なれば覺侍らず。かしこく左にて侍る。右手折侍ましかば」ということであつた。どうい
う妬みか明確には分からないながらも、母に原因のあつた折れた肘が治つたことにより、長年の母の罪が許されたこ

との喜びの思いからの涙であつたと思われる。但し、この例も、同文とされる『打聞集』二六「公野聖事」も同じく「聖人むく連子許なみだを出泣、三度札」と描かれており、この例から『宇治拾遺物語』の「涙」の独自性を言うことは出来ない。

「高忠侍、歌読む事」(一四八 卷二ノ一二)は、法師になりたいと思ひながら、貧しく、布施にするものがなかつた老侍が主人公である。思わぬことから主人の衣を、その北の方の薄色の衣を得て、それらを布施として捧げ、「尊き聖」に懇願する時

「法師になさせ給へ」と泪にむせかへりて、泣くく

いひければ

と表現されている。「年罷老ぬ。身の不幸、年を追まひてまさる。この生の事は、益もなき身に候めり。後生をだにいかでとおぼえて、法師に罷ならんと思侍れ」というように、何としてでも法師にして欲しいと切に願う。その思いの一端さが涙となつて表れたものと思われる。

雪がひどく降る日、震えながら掃除をしている老侍を憐れみ、高忠は歌を詠ませ、その褒美として衣を与えたのだが、その時、侍は「二ながらとりて、かいわぐみて、脇にはさみて立ち去りぬ」と描かれ、喜んでいるようには見えず、

ず、さも当然というような傲慢ささえ見える。但し、戒の師の前では、「かく思かけぬ物を給たれば、限りなくうれしく思給へて」と述べており、主人高忠に対する深い感謝の念はあつたのである。ただ、衣を頂いた時は突然のことに驚き、早く出家しようとの思いにせかされて、お札を申すことも出来なかつたのである。この時の気の咎めがこの「涙」の場面にも影響していると思われる。「法師になさせ給へ」という懇願の涙の裏には、主人高忠への感謝の思いとお札を述べられなかつたことへの後悔とお詫びの気持ちがあつたと思われる。但し、この例も、同話とされる『今昔物語集』巻第一九第一三「越前守藤原孝忠侍出家語」では、「涙ニ噎テ泣、云ケレバ」、「古本説話集」四〇「高忠侍事」「涙にむせかへりて、泣くく言ひければ」と同じ表現であり、『宇治拾遺物語』の「涙」の独自の表現を言うことは出来ない。

二

「尼地藏見奉る事」(一六話)では、話末の「されば心にもふかく念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信すべし」に見えるように地藏菩薩に会いたいという尼の一端な思いが描かれている。又、博打の「地藏のありかせ給ふみ

ちは、我こそ知りたれば、いざ給へ、あはせ参らせん」の言葉に、尼は「あはれ、うれしき事哉」と言い、同じく博打の「くは、こ、なり。ぢぢぢうのおはします所は」といへば、尼、うれしくて、つむぎのきぬを、ぬぎてとらすれば」と「うれし」が二度繰り返され、博打に対する疑いは微塵もなかったと思われる。

地蔵という名の童が帰ってきたと聞いて、「尼、見るま、に是非もしらず、臥しまろびて、おがみ入て、つちにうつぶしたり」には、姿を見ることもなく、確認しようとする態度も見えない。博打の言葉を無条件に信じきっているのである。そして、

尼、おがみ入て、うち見あげたれば、かくてたち給へれば、涙をながしておがみ入参らせて、やがて極楽へ参りけり

と描かれている。拝んでいた顔を上げ、「地蔵の御顔」を見ることが出来たのである。

地蔵を拝むことが出来、感激し、極楽往生出来たのである。博打の言葉を疑うことを知らない、全くの純粹な気持ちがあつたと言える。地蔵の顔を見て流した尼の涙は、地蔵を拝みたいという念願が叶ったことの感激の涙として解することが出来る。尼の強い地蔵信仰により地蔵菩薩を問

近に見て拝むことが出来たことで、尼は極楽往生出来ることを確信したと思われる。その喜びからの涙でもあつたのである。但し、往生するための地蔵との直接の面会であつたため、この念願叶った感激の涙、往生出来る喜びの涙は、一連のものとも考えられる。

この尼は寺に属することなく、孤独に修行していたようであり、これまでの人生の恵まれたものではなかったことを思わせる。それだけに、この世の憂苦から逃れることを望み、及び拝んだまま極楽往生したことから見えるように死を待ち望んでいたとも思われる。安堵と喜びの涙でもあつたと考えられる。

「実子ニ非ザル人、実子ノ由シタル事」(七七 卷七ノ八)は真に感動しての涙ではない点、他の場面とは違っている。主人公の男は、実子ではないという噂を気にして、その疑いを晴らしたいと思っている。そこへ、長年仕えていたという侍と対面した時、侍は「さくりもよ、に泣く」状態であつた。その理由を問うと、「故殿のおはしましに、たがはせおはしまさぬが、あはれにおほえて」ということであつた。実子にあらざる男は、この侍によつて、自らの潔白を晴らそうとした。一方、侍も「しおふせてあたり」と思惑通りに事が運んでいる満足感に浸っているが、「そらごと

せじ』といふ事をぞ仏に申きりてける」ということから、実子にあらざる男の思い通りには進まない。

親しい人たちとの対面の時、実子にあらざる男の「汝をよび入たりし折、我、障子を引あけて出たりし折、うち見あげて、ほろくくと泣しは、いかなりし事ぞ」と問われて御障子を引あけさせ給候しを、きと見あげ参らせて候しに、御烏帽子の真黒にて、まづさしいでさせおはしまして候しが、故殿のかくのごとく出させおはししたりしも、御烏帽子は真黒に見させおはしませ候が、思いでられおはしまして、おほえず、涙のこぼれさぶらひしなり

と侍が答える時に「涙」が描かれる。同じ場面でありながら一方は「泣く」、一方は「涙」と表現されている。侍の「涙」は「故殿」を思い出した感動の涙というだけでない。この「涙」は「泣いた」ことの真相が明らかにされることによつて、実子にあらざる男の思惑が外れて、却つて自分が実子でないことを明白にする結果となつた。説話のクライマックスにおいて、「泣く」ではなく「涙」が選ばれたと考えられる。この「涙」は侍にとつては真実の感動の涙ではなく、むしろ、作爲的な「涙」であつた。実子であることを証明するはずの侍の「涙」が、却つて、実子ではな

いことを証す「涙」となつたのである。

「山横川賀能地藏事」（八二 卷五ノ一三）では、賀能知院は「きはめて破戒無慙のもの」とされており、その死に際して、師の僧都は「後世、さだめて地獄に落ん事、うたがひなし」と思い「心うがり、あはれみ給事、かぎりなし」という状態であつた。しかし、賀能知院が日常的に「ふるき地藏の物の中に捨置きたるを、きと見奉りて、時く、きぬかぶりしたるをうちぬぎ、頭をかたぶけて、すこしうやまひ拝みつゝ、行」ことによつて、地藏菩薩が足に火傷を負つてまで、地獄へ賀能知院を救いに行つたことを、師の僧都は夢で知り、

さて、夢さめて、泪とまらずしてと描かれている。まさにこの「涙」は、地藏菩薩が火傷を負つてまで、弟子の賀能知院を地獄から救い出してくれたことに對する、深い感謝の念からの「涙」である。

又、師の僧都は地獄に堕ちた弟子を憂えていたが、救出されたことに限らない喜びの念を感じたことであろう。この喜びの「涙」でもある。そして、「破戒無慙のもの」と思つていた賀能知院にも信仰の心があつたことに、心を熱くさせるものがあつたことであろう。更に、師として弟子を救ふことが出来なかつた後悔・苦惱から救われた思い

がしたことであらう。こうしたこともこの「涙」には込められていると思われる。

「海賊発心出家事」(一一三三 卷一〇ノ一〇)では、海賊舟とも知らず、その舟を信頼しつき従っていたが、海賊舟が本性を表し、舟を乗っ取ろうとした時、

主人、手を、こそく〜とすりて、水精のずゝの緒、きれたらんやうなる涙を、はらく〜とこぼしてはいはく、

「よろづの物は、みな取給へ。たゞ我命の限は助け給へ。

京に老たる親の、限りにわづらひて、今一度見んと申たれば、夜を昼にて、告げに遣はしたれば、いそぎ罷上る也」ともえいひやらで、我に目を見合はせて、手をするさまいみじ

と描かれている。この「涙」は、京の臨終にある親に一目会いたいという切なる思いからの涙であり、何とか命だけは救つて欲しいという嘆願の「涙」である。

又、昨日、海賊舟とも知らず「さるべきたのもしき人も具せねば、おそろしくて、此御舟をたのみて、かくつき申たるなり」と、不用意にも内情を明かしてしまい、そのことが襲われる原因となったことへの深い悔恨の念からの「涙」でもある。加えて、海賊の頭領が突然の発心を起こした時「男の手をすりて、はらく〜と泣まどひしを海に入し

より、すこし道心おこりにき」と言うように海賊の頭領の「道心」を導く「涙」の意味もあったのである。

「日藏上人、吉野山ニテ逢鬼事」(一一三四 卷一一ノ一〇)においては、恨みを晴らすため、鬼と化したもののその嘆きを

此鬼、泪にむせびながら申やう、「我はこの四五百年を過去の昔人にて候しが、人のために恨をのこして、今はかゝる鬼の身となりて候。さてその敵をば、思のごとくにとり殺してき。それが子、孫、彦、やしは子にいたるまで、のこりなくとり殺し果てて、今は殺すべき物なくなりぬ。(中略)敵の子孫はつきはてぬ。我命はきはまりもなし。かねて此やうを知らましかば、かゝる恨をば、残さざらまし」といひつゞけて、泪を流して、泣く事限なし。

と描かれている。鬼の「涙」の理由は「かねて此やうを知らましかば、かゝる恨をば、残さざらまし」というように、鬼と化して恨みを晴らそうとしたことの後悔である。鬼と化し恨みを晴らしたとしても、再び人間に戻ることは出来ず、いつまでも消えない願毒のために「無量億劫の苦」を受けると知っていたならば、鬼に化して恨みを晴らすうとは思わなかったというのである。この悔いても悔い切

れない後悔の念からの「涙」なのである。そして今、鬼と化して「無量億劫の苦を受けんとする事の、せんかたなくかなしく候」というように、鬼となつて、「無量億劫」の苦しみから逃れることの出来ない悲しみの涙である。

「仁戒上人往生事」(一九四 卷一五ノ九)では、仁戒上人は、

さりながら、此妻と相具しながら、更に近づく事なし。堂に入て、夜もすがら眠ずして、涙を落して行ひけり

と描かれている。仁戒上人は、「すでに出家の身でありながら、既成の教団の組織から離れて、自由な聖の境涯に入⁽⁴⁾」

ろうとしたが、時の別当興正僧都は仁戒上人の力を惜しんで許さなかつた。そこで、仁戒上人は「いたづら物に成ぬと人に知らせんためなり」と「西の里なる人の女を、妻にして通ければ」「家の門に、此女の頸にいだきつきて、うしろに立そひたり」という行動をとり、「人見て、あさましがり、心憂がる事限なし」という有様であつた。このような偽悪行動をとりながら仏道修行時に涙を流すのである。

この「涙」は、本来の自分の願いが叶えられずにいることの歎き、悔しさからの涙であろう。加えて、利用している女性への申し訳ない思い、罪悪感からの「涙」だと考えられる。これら六話には同話はないため、断定は出来ない

が、「涙」に二つ以上の意味・背景・理由が考えられる点に、「泣く」との違いが認められるという『宇治拾遺物語』の「涙」の特徴を見ることが出来る。

三

動物の流す「涙」が三話ある。「三川入道、遁世之間事」(五九 卷四ノ七)では、雉が生きたまま料理されるという残酷な場面で、

鳥の、目より血の涙をたれて、目をしばた、きて、これかれに見合はせける

と雉が血の涙を流すのである。動物であるだけに「なく」では血の涙を流すことを意味することは出来ず、「目より血を流す」においても涙を流すことを意味することにはならない。そのためにとられた「涙」の表現であつたとも解される。しかし、この場面においても先程と同じく涙を流す複数の理由が見出せる。一つは「目をしばた、きて、これかれに見合はせける」に見えるように、助けを求めて必死に懇願することからくる「涙」である。今一つは、痛みからくるこれ以上ない苦痛からの「涙」なのである。但し、同話の『今昔物語集』巻第一九第二「参河守大江定基出家語」においても、同じく「鳥、目ヨリ血ノ涙ヲ垂テ」と表

現されており、『宇治拾遺物語』独自の表現とは言えないのである。

「五色鹿事」(九二 卷七ノ二)の鹿は動物としてではなく、人間的な心・感情をもつたものとして描かれている。

「身の色、五色なり。人知りなば、皮を取らんとて、必殺されなん。この事をおそるゝによりて、かゝる深山にかくれて」いるのである。それ故、溺れている男を助けた時にも鹿は「この山に我ありといふ事を、ゆめ／＼人に語るべからず」と男に約束させている。助けられた男は「もとの里に帰りて月日を送れども、更に人に語らず」と鹿との約束を固く守っている。ところが、この男も大王の「もし五色の鹿、尋て奉らん物には、金銀、珠玉等の宝、并に一國等をたぶべし」の宣旨を聞き、欲に負けてしまい、とうとうこの鹿のことを明かしてしまう。探し出されてしまった鹿は、命を賭けてまで助けた男の裏切りをなじり、深く恨む。その場面は、

「命を助けたりし時、此恩、何にても報じつくしがたきよしいひしかば、こゝに我あるよし、人に語るべからざるよし、返／＼契りし処也。然に今、其恩を忘れて殺させ奉らんとす。いかに汝、水におぼれて死なんとせし時、我命を顧ず、泳ぎ寄りて助し時、汝かぎりな

く悦し事はおほえずや」と、深く恨たる気色にて、泪をたれて泣く。

と描かれている。この「涙」は人間的な涙であり、裏切つた男を深く恨むところからの「涙」である。とともに、今、殺されんとするところからくる悲しみの「涙」でもある。

又、男を信じたことが仇になり、男を信じたことへの後悔からの「涙」の意味もあつたものと思われる。但し、この例も『今昔物語集』巻第五第一八「身色九色鹿山出河辺助人語」において、同じく「涙ヲ流シテ泣ク事無限シ」と描かれており、『宇治拾遺物語』の独自の表現とは言えない。「吾婦人止生贅事」(一一九 卷一〇ノ六)では、猿神が退治されようとする場面で、

顔を赤くなして、目をしばたゝきて、齒を真白に食ひ出して、目より血の泪をながして、まことにあさましき顔つきして、手をすりかなしめども、さらに許さずと描かれている。「目をしばたゝきて」が示すように、突然の出来事に驚き、事態が飲み込めず、あわてふためいているが、首に刀があてられ、犬が食いつこうとしているため、死の恐怖心からの「血の涙」だと考えられる。更に、「中山は猿丸にてなんおはする」とあるように、神として崇められている自分が、今、一人の男に脅され、殺されよ

うとしている屈辱的な目にあつてゐるといふ、歎きの「涙」でもあつたと思われる。

「高階俊平ガ弟入道、算術事」(一八五 卷一四ノ一一)の「涙」は、今までの例とは違つて、笑い過ぎての涙である。又、主人公高階俊平の弟の不運・悲劇とは直接関係のない人々の涙である点にも違いがある。それだけに、他の例と同等には扱えない例であるかもしれない。しかし、この例の「涙」にも複雑な背景が考えられるので考察することとする。まず、可笑しくて、笑い過ぎての苦しさからの「涙」が理由として考えられる。

若い女房たちは、俊平の弟が惚けていることをからかい、「かゝる人はおかしき物語などもするぞかし」と言い、「人々笑ひぬべからん物語し給へ。笑ひて目さまさん」と笑わせてもらおうとしてゐる。そして、俊平の弟が「算」を用いて笑わせようとするのを見て、女房たちは「是が、おかしき事にてあるか(あるか)」と言ひ、更に「その算、さ、げ給へるこそ、おこがましくておかしけれ。何事にて、わぶ斗は笑はんぞ」と俊平の弟を嘲り、軽んじていた。それが、

腹のわた、切る、心地して、死ぬべくおほえければ、
涙をこぼし

というように、死にそうなる程笑う事態となつた。そして、「笑ひさめ」てから「いましばしあらましかば、死なまし。またか斗たへがたき事こそなかりつれ」と言う。女房たちは俊平の弟を、惚けた者として軽く見ていたことを、そしてこうしたことを計画したことを後悔する思いを抱きながら「涙」を流し笑つていたものと思われる。

俊平の弟は「算術」で大成する力を持ちながら、不測のことのため算術の師の恨みを買ひ、惚けてしまつた。女房たちの笑い過ぎての涙に、作者(編者)は俊平の弟の不運の「涙」を重ねて見ていたのではないだろうか。但し、この場面も同話『今昔物語集』巻第二四第二二「俊平入道弟習算術語」においても、同じく「咲ヒ乍ラ涙ヲ流ス者モ有ケリ」と表現されており『宇治拾遺物語』の独自表現とは言い切れない。

四

「静観僧正祈雨法験之事」(二〇 卷二ノ二)では、
熱日の、しばしもえさしいでぬに、涙をながし、黒煙をたてて、祈誓し給ければ、香呂の烟、空へあがりて、
扇ばかりの黒雲になる

と描かれてゐる。気温も高く、「祈誓し給こと、見る人さへ

くるしく思けり」とあるように、この「涙」は、厳しい暑さの中、「額に香呂をあてて」祈誓することの耐え難い苦しさをからくるものであろう。早魘のため「六十人の尊僧」を集めて祈雨をするが、効果はなかった。そこで、静観僧正に「ことさら思食さる、やうあり。如是、方に御祈ども、させるしるしなし。座をたちて、別の壁の本にたちて、祈れ。おぼしめすやうあれば、とりわき仰付るなり」という命があつた。この格別の拔擢に「面目かぎりなくて」とあつたように名誉に思い、何とか応えようと一心に祈ることからくる涙でもある。そこには先輩たちの鼻をあかそうという野心的な思いもあつたことと思われる。

更には、「静観僧正、其時は律師にて、上に僧都、僧正・上臈どもおはしけれども」と低い地位にある。そのせいか「座をたちて、別に壁の本にたちて、祈れ」と一段低く見られた処遇を受ける。この悔しさの「涙」を見ることも出来ると思ふのである。同話の『打開集』四「静観僧正事」では、涙を流す描写はない。能力の高さを示すように簡単に雨をふらせている。それだけに、この「涙」は『宇治拾遺物語』の独自性を示す例だと思われる。

「多田新発郎等事」(四四 卷三ノ一二)では、多田新発郎等は鹿・鳥を狩ることを生業としている。殺生をする

身でありながら、「いさ、かの善根する事なし」という有様であつた。その郎等が死に「炎魔の庁」で生前の「罪の軽重にしたがひて」罰せられる酷さを見て、

我一生の罪業を思つゞくるに、涙落ちてせんかたなしと描かれている。その後、かつて「鹿を追て、寺の前を過しに、寺の中にあ」る「地藏菩薩」に少し「帰依の心をおこし」たことにより救われるのであるが、その時に感激の「涙」を流すわけではない。殺生し「善根」をすることのなかつたわが身の罪を思つて、これから行われるだろう厳しい責めの恐ろしさから「涙」しているのである。そして、殺生を生業とするわが身の運命を恨み、又、善根を施すこととのなかつた自分の生き方を深く反省もしたのであろう。こうした後悔も涙の背景にあつたものと思われる。同話の『今昔物語集』巻第一七第二四「聊敬地藏菩薩得活人語」ではこの場面「目暗レ心迷テ悲キ事無限シ」と表現されており、『宇治拾遺物語』の「涙」の独自の方法を見ることが出来ると思ふ。

「五色鹿事」(九二 卷七ノ一)は、先程見たように男に裏切られた鹿の涙が描かれていたのであるが、この説話では、鹿と男との関係を聞いた大王の涙も描かれている。

大王同じく涙をながしてのたまはく、「汝は畜生なれど

も、慈悲をもて人を助く。彼男は欲にふけりて恩を忘れたり。畜生といふべし。恩を知るをもて人倫とす」とて、此男をとらへて、鹿の見る前にて、首を斬らせらる。又、のたまはく、「今より後、国の中に鹿を狩事なかれ」

と、男を死罪にする。いかに大王の憤りが深かつたかが分かる。命の危険をも顧みず、慈悲の心から溺れる男を助けた鹿に対する限りない称讃、感動からの「涙」である。と同時に、「欲にふけりて恩を忘」れた男への深い嘆き、人としてあるまじき行為への失望・怒りからの「涙」だと思われる。更には、「今より後、国の中に鹿を狩事なかれ」という大王の命を見ると、後の言うままに「身は五色にて角白」き鹿を捕えた者に褒美を与える宣言を出したことへの後悔の念があつたと思われる。珍しい鹿の運命も考慮せず、地道に生きている人々の歎心を煽るような宣言を出したことへの深い自責の念からの「涙」であつたと思われる。同話の『今昔物語集』では、「鹿の涙」は同じく描かれていたのに、大王の涙は描かれていないという点、大王の「涙」に『宇治拾遺物語』の独自の用法を認める事が出来る。

『吾婦人止生贄事』（一一九 卷一〇ノ六）も先程見たように「猿神」の涙が見られたが、生贄に選ばれた女性の涙

も描かれている。

物思たる姿にて寄り臥して手習をするに、涙の袖の上にかゝりて濡れたり。かゝる程に人のけはひのすれば、髪を顔にふりかくるを見れば、髪も濡れ、顔も涙にあらはれて、思入りたるさまなる

と二度涙が描かれ、「物思たる姿」「思入りたるさま」と描かれている。悲惨でいたましい生贄となつたことへの死の恐怖からの「涙」だと考えられる。

又、父母も「親子と逢見ん事、いまいくばくならずと思ふにつけて、日をかぞへて、明暮はたゞねをのみぞ泣く」「生贄にさしあてられ侍れば、思くらし歎きあかしてなん、月日を過し侍る。（中略）いとあはれにかなしう侍るなり」と悲嘆にくれている。このように自分が原因で父母を歎かせていること、そして、父母との永遠の別れとなることからの悲しみの「涙」でもあると思われる。同話の『今昔物語集』では、「猿神」の涙は同じく見られたが、女性は「髪ヲ振懸テ泣臥タル」とは描かれているが、「涙」は描かれてはいない。この「涙」の例にも『宇治拾遺物語』の独自の方法を見ることが出来る。

五

『宇治拾遺物語』の「涙」は二十一箇所、十六話ある。その中、同話とされる説話にも同じく涙が描かれる例は九例ある。同話のない例は七例である。同話を有しながら『宇治拾遺物語』のみ涙が表現されているのは五例である。数からでは断定出来ないのであるが、『宇治拾遺物語』においては、同じ泣く場面が続く時、そのクライマックスでは「涙」が表現されている。いわば禁欲的に涙は用いられ、重要な場面でのみ涙は用いられていると思われる。感極まつての感情の高ぶりに人は泣くのではあるが、ただ一途な思っただけではない、涙する二つ以上の理由が認められる時、背景に複雑な思いがあると作者（编者）が認めた場合「泣く」ではなく、「涙」が描かれるものと思われる。⁽⁶⁾『宇治拾遺物語』は原話を忠実に継承していると考えられているのではあるが、『宇治拾遺物語』には「涙」の独自の表現方法があると考えられる。

註

(1) 田村憲治氏「龍門の涙―宇治拾遺物語の一面」〔『解釈』第二六卷七号・昭和五五年刊〕

(2) その他「なきまじふ」六例、「なきあふ」三例、「なきさけぶ」二例、「うちなく」二例、「なきさわく」一例、「なきのしる」一例、「なきわぶ」一例、「なきある」一例、「さげびなく」一例、「したなき」一例、「よるこびなく」一例、「よるこびなき」一例である。（増田繁夫氏・長野照子氏著『宇治拾遺物語総索引』清文堂出版 昭和五〇年刊 参照）

(3) 三木紀人氏・浅見和彦氏校注『宇治拾遺物語』古本説話集（新日本古典文学大系・岩波書店 一九九〇年刊）二二九頁頭注参照。

(4) 大島建彦氏校注『宇治拾遺物語』（新潮日本古典集成・新潮社 昭和六〇年刊）五三一頁頭注参照。

(5) 『今昔物語集』巻第二十六第七「美作国神、依願師謀止生贖語」においても、「涙ヲ垂テ」と表現されており、『宇治拾遺物語』の独自性を言うことは出来ない。

(6) 『宇治拾遺物語』「竜門聖、鹿ニ欲替事」（七卷一ノ七）では、「涙」ではなく、「泣く」と表現されているが、田村憲治氏は前掲論文において、「男に射殺されて本意を遂げることができなかった余りの涙」に加えて、「一途に男の殺生を止めさせ、男を救わんが為であった」「その一途な心が溢れでた聖の涙」と考察されている。

付記

テキストとして『宇治拾遺物語』、『古本説話集』は、三木紀人氏・浅見和彦氏・中村義雄氏・小内一明氏著『宇

治拾遺物語 古本説話集』（新日本古典文学大系・岩波書店 一九九〇年刊）、『今昔物語集』は『今昔物語集』（新日本古典文学大系・岩波書店）、『打聞集』は中島悦次氏著『宇治拾遺物語打聞集全註解』（有精堂 昭和五十六年刊）を用いた。